



# 佐賀県に和牛繁殖の大規模放牧経営が出現

## 「みかん廃園など遊休農地を売買事業で再生」

佐賀県藤津郡太良町は、有明海に面する山間農業地域。農家戸数約800戸のうち専業経営は238戸あるものの漸減傾向にある。耕地面積は約1100㍏。昭和30年代から温州みかんの栽培が盛んに行われたが、担い手の高齢化とみかん価格の低迷により、みかん園は荒廃化が進み、全体で約283㍏の耕作放棄地が発生しており、この解消が課題となっている。本事例は、この荒廃みかん園12㍏を佐賀県農地保有合理化事業公社が売買事業で買い入れて、和牛繁殖農家に売り渡し、県内最大の放牧経営が実現した事例である。

**放牧面積** 116㍏  
**放牧頭数** 115頭

太良町にある堀博明さん（35歳）の繁殖牛放牧経営の内容から見てみよう。労働力は経営主の博明さん（妻は会社員）と父親の勝郎さん（65歳）夫妻の3名。別表の通り約21㍏の農地・採草放牧地で、繁殖和牛115頭という大規模経営である。この経営に至る足取りについて、勝郎さんと博明さんに聞いてみた。

「本格的に牛飼いを始めたのは昭和56年。それ以前は、繁殖牛14〜15頭と露地の温州みかん2・3㍏という複合経営でした。みかん価格の低迷と労働力不足といった経営上の問題などからハウスマカんに切り替えてみたものの、結局はうまくいかず牛飼いに逆戻り、徐々に繁殖に本腰を入れることになりました。追い込み方式の畜舎を建設し、頭数の拡大を進め、そして放牧へと切り替えていったのが平成7年ころでした。途中、BSE問題で経営に痛みを負ったものの、その後、素牛価格の高騰でようやく軌道に乗りました。放牧技術については、先進地といわれている山口県（長門）や長崎県

島原方面に視察調査などを重ね勉強したが、当時から自分の技術が決して誰にも負けないものであったと思う」と自負を語る。

**放牧で規模拡大を県公社が遊休荒廃園を仲介**

みかん園と飼料畑（水田裏の借地を含む）に、繁殖牛の複合経営であった堀さんが、生産コストの削減を図るため和牛の放牧事業に舵をきったのは平成13年。まず、自宅横に隣接するみかん園60㍏（自園）を子牛の管理用に放牧地化することからスタートした。続いて14年には、やはり自園のみかん園を育成牛の放牧地に転換。このころになると放牧技術は完璧に身につけていたと話す。18年に息子の博明さんのUターン就農が決まったことが契機となり、堀さんは更なる放牧経営の規模拡大を目指した。



左より佐賀県藤津農業改良普及センターの村田賢治主査、経営主の堀博明さん、父親の堀勝郎さん、太良町農業委員会の澤山弘幸主査。背景に放牧地の一部が見える。

続いて、この山林に隣接する不在地主の所有する遊休みかん園約12㍏を、佐賀県公社の合理化事業により買い入れる見通し

がつき、最終的に堀家の経営の本拠地はここに決まった。太良町農業委員会からあつせんを受けた佐賀県公社は、19年

度事業として遊休みかん園約12㍏を合理化事業により買い入れ、後継者の博明さんに20年3月に売り渡した。売却価格は約1500万円（制度資金を活用）であった。

**堀さんの放牧経営の特徴**

次に、堀さんの放牧経営の内容およびその特徴を取材資料（放牧形態の概要および放牧位置図）などから見てみよう。

分挽舎の周辺にある遊休農地（みかん廃園）に電気柵を設置し、受胎確認した母牛を放牧し、その後放牧地の一部で自然分挽を行っている。

放牧では景観重視のため、草地の生産力よりも草勢を考慮し、草種（シバ牧草）の播種（現在はパビアグラス）している。支柱に塩化ビニール管を使用し、電牧線も一本にしてコスト削減に努めている。また補助飼料として、自給飼料や野菜カット工場からの野菜クズ、河川敷の草を利用している。

過放牧を防ぐため増頭に合わせ放牧地の拡大を進め、150頭規模まで増頭している。

管理の効率化のために運動スタンションなど必要最小限の設備を整備、牛舎は特に必要としない。

発情の見落としを防ぐために、発情発生システム（牛歩）を導入している。

分挽の見落としを防ぐために、分挽監視通報システムを導入している。

**後継者の就農**

堀さんの経営規模の拡大は、息子の博明さんの就農が契機となる。博明さんは、高校卒業後、大阪の食肉の加工販売の商社で営業マンを10年程経験し、平成18年にUターンした。「経営移譲を前提に自分で生産から販売までやろうと思ひ、会社勤めをやめて就農しました。大阪では肥育牛生産者とその販売先を営業するポストにいた関係で、食肉業界にも精通し、いまの自分の経営に大きな経験となったと思います」と話す。

「全くの遊休荒廃地（雑木竹林）でした。どうしようもない岩石だらけでしたが、人間が手を入れ



労働力3名	
飼料畑面積	5㍏( 所有地2.3㍏、借入地2.7㍏ - 水田裏作を含む。)
放牧面積	16㍏( 所有地14.2㍏、借入地1.8㍏ )
	計21㍏( 放牧面積のうち12㍏を佐賀県公社の合理化事業で取得 )
繁殖和牛	115頭
放牧頭数	115頭
放牧期間	12カ月

(注)堀勝郎氏からの聴き取りによる。平成20年からいこと共同経営を開始。いとこの所有地は30㍏のパドックと畜舎。

堀博明氏の放牧形態の概要と放牧地

注:佐賀県藤津農業改良センター資料より

繁殖ステージ毎に専用の放牧地で管理			
繁殖和牛	115頭	放牧頭数	115頭
放牧面積	約16㍏		
播種草種	カーペットグラス、センチピートグラス、パビアグラスを中心に播種し、3年目より定着した。現在、新規取得の12㍏のカーペット・パビアグラス草地造成を計画している。		
牧 柵	電牧は放牧専用支柱・間伐材・塩化ビニール管などを利用。電源は牛舎からの家電式と離れた場所はソーラー式、電線は1段。		
水 源	みかん園を利用しているため、既存のスプリンクラーや井戸、出水を利用している。		

  

放牧ステージ1(分娩5日後～妊娠鑑定まで:4カ月間)		放牧ステージ2(妊娠確認後～分娩2カ月前:6カ月間)	
特徴	飼料給与、種付け、妊娠鑑定などの作業を行う 発情見落としを防ぐため、牛歩を装着	特徴	牛の移動などのため運動スタンションを設置している 放牧面積に対し放牧頭数が多いため、草地だけでなく 補助飼料として自給飼料、野菜くずを給与させている
妊娠確認後、放牧ステージ1に移動		子牛の分離後、繁殖牛舎へ移動	
分娩2カ月前に、放牧ステージ2に移動		分娩2カ月前に、放牧ステージ2に移動	
放牧ステージ3(分娩2カ月前～離乳まで:2カ月間)			
特徴	人工哺乳による群管理を実施	特徴	分娩前のため、補助飼料として濃厚飼料を給与している 自然分娩させた後、5日目に母子分離を行い、それぞれの牛舎に移動 分娩予測システムをリースで導入、分娩前に携帯にメールで連絡が来るので、 手分けして出産に立ち会っている
生後5日目に、子牛牛舎へ移動		子牛	



注:佐賀県藤津農業改良普及センター資料

トを下げ、もうかる経営を目指すとするこの事例では、「合理化

事業による約12㍏の土地の購入が経営の重荷になっているもの

の、所有農地は経営資産にもなるので妥当な投資だと思っし、

「妥当な面積」と県普及センターは考えている。県公社も「12㍏

(注) このレポートは平成21年4月に現地取材したものである。現地には佐賀県公社の門田浩明さんに案内頂いた。また、現地では佐賀県藤津農業改良普及センターの村田賢治主査と太良町農業委員会澤山弘幸主査にアドバイスを頂いた。  
太良町農業委員会は第1回耕作放棄地発生防止・解消活動表彰事業で、繁殖和牛の放牧による耕作放棄地の解消活動で全国農業会議所会長賞を受賞されていることを記しておく。

たのは電牧柵を設置するところだけで、最終的には牛がきれいな放牧地に整備してくれた」と話す勝郎さんは、今では経営は博明さんに一任している。  
これからの経営方針について尋ねると、「親父達(家族)と一緒に仕事はしたくないのが正直な気持ち(笑い)です。この放牧形態であれば労働力は2名で十分なので、今のところ法人化は考えていません。さらに規模が大きくなり人手が足りなくなったら他人の雇用でカバーしたい」と冷静に将来を語る。  
また、規模拡大については、「年間100頭は出荷しないと採算が合わないのが、徐々に頭数は確保しているが、1頭40万円前後の計算で120頭はほしい思っている」と返ってきた。  
「県内最大の大規模放牧経営となっている。繁殖は『種付けとお産が命』なので、この牧場では発情発生システム(牛歩)でそれを確認しています。これは宮崎県で開発されたシステムで、佐賀県内の上場・唐津方面では実証済み。20〜50時間前にメールで知らせてくれるシステムで、これを人件費に換算すると大幅

なコスト低減になっていきます。頭数が増えると、とりわけ屋外では事故が起きやすい。この事故を極力少なくする分娩監視システムも実用段階に入っている」と、佐賀県藤津農業改良普及センターの村田賢治主査が解説した。  
博明さんも「放牧経営の課題は労力の節減と経費をいかに削り、コスト低減を図るかが最大の課題ですが、これらのシステムの導入で労力を節減し課題を克服したいと考えています。牛がいつ産まれるかは人の経験も大きいけれど、それが軽減された。放牧における事故は、いまままで死産以外にはない。いまは100%対応できていると思っ

ています」と加えた。  
さらに博明さんは「3種類の芝(カーペットグラス、センチピートグラス、パビアグラス)と自給粗飼料の増産、野菜くず(諫早市のカット野菜の残渣)を活用している。コスト低減は草地と野菜くずがあったからこそだと思えます。また草地規模がそこそこあったからこそ糞尿処理の経費を下げる事ができた。これから約5㍏を借地で拡大す

るので、放牧面積としては、この規模であれば十分足りています。いかに良質の牧草を生やすかは自分の課題ですが、最終的には、牛の面倒を見ないでも、牛が自分で育つような放牧経営に持っていく。販売額が1頭30万円を下っても採算が合うのは放牧しかない。これが放牧経営だ」と思っている。  
何の経営もそうであるように、とりわけ和牛放牧経営にとって生産コストの削減が、その成否を左右する。放牧で生産コス



自宅に隣接する「放牧ステージ3」の放牧地。